くまもと文学・歴史館報

くまもと文学歴史館

くまもと文学・歴史館のこの一年
―あたらしい知の発信に向けて―

佐藤　信
（くまもと文学・歴史館長）

令和三年度から服部英雄前館長の後を継いでくまもと文学・歴史館長に就任して、早くも一年を迎えようとしています。先輩の前館長とは、学生時代以来、文化庁の文化財調査官時代など、長く親しくおつきあいいただいてきました。私と熊本のご縁は、専攻する日本古代史とつながる史跡鞠智城跡や、史跡・名勝等の記念物、世界文化遺産など文化財の保存・活用を通して、深い関心とかかわりをもってまいりました

この一年のくまもと文学・歴史館の事業は、コロナ禍によって休館など大きな制約を受けてきました。しかし厳しい状況下にありながら、六月からの収蔵品展アーカイブズに見るくまもと17「和歌をよむ武士たち―相良家の歌道―、戸川秋骨―生誕一五〇年―」、七月からの企画展「没後四〇年　横溝正史展」、十月からの企画展「かたくなにみやびたる―蓮田善明と『文藝文化』―」を開催しました。令和四年にも一月から収蔵品展アーカイブズに見るくまもと18「激闘の記録、西南戦争の絵図、生誕一五〇年渋川玄耳と篠原温亭」、三月からは特別展「湧水と生きる―江津湖の歴史と文学―」を開きます。

これらの展示は、いずれも大変充実した内容と自負しており、コロナ禍のもとながらマスコミでも報道され、ご覧になった方々からは高い評価をいただいています。またわざわざ遠方から来館された方もかなりおられました。展示の背景には、普段から調査・展示にあたる学芸スタッフの地道な努力の成果や、諸方面の皆様からのあたたかいご支援がありました。これからも、ウィズコロナの状況を見極めながら、展示をはじめオンラインなどの方法でさらに皆様に向けた多様な発信をめざしたいと思っています。

今日、災害・疫病・環境問題や高齢化・過疎化などの厳しい課題のもとで、持続可能で平和・安心な社会をめざすことが、私たちには求められています。あたらしい地域・郷土を創り地域社会をより豊かにするためには、めざすべき方向を探る上で、地域の歴史・文化・伝統や先人の知恵を見据える人文知が、これまで以上に大切だと思います。そうした地域の「知」を探り未来を指向する際には、地域・郷土に関する史資料や調査・研究成果についての情報を広く人々が共有することが、重要な前提となるでしょう。

こうした知にかかわる情報を幅広く提供・発信することが、これからのくまもと文学・歴史館の大きなテーマになると考えます。展示や講演会その他のイベント等を通じて、多様な史資料・情報・調査成果の魅力を発信する事業を、さらに進めていきたいと思っています。その際、熊本県立図書館だけでなく、県内外の関連する博物館・図書館・資料館や大学等の研究・教育機関その他史資料所蔵機関のご協力・連携を得て、熊本の文学・歴史・文化・伝統を明らかにしていくことに努めたいと考えます。

見通しの悪い時代ながら、百年後を見すえて進む所存ですので、今後とも、皆様からぜひ積極的なご支援を賜りますよう、よろしくお願い致します。

佐藤　信（さとう・まこと）
一九五二年東京生まれ。東京大学名誉教授、横浜市歴史博物館長。東京大学大学院修了後、奈良文化財研究所、文化庁文化財調査官、聖心女子大学を経て、一九九二年から東京大学で教鞭を執る。二〇一八年定年退職、人間文化研究機構理事を経て二一年度より現職（鞠智城跡保存整備検討委員ほか）。

第７号
目　次

巻頭言　佐藤　信（くまもと文学・歴史館長）……１頁
企画展・関連講演会報告……２頁～５頁
収蔵品展・共同展示・マンガコーナー・新収蔵資料報告……６頁～７頁
友の会事業報告・くまもと文学・歴史館ＹｏｕＴｕｂｅについて……８頁

企画展報告――

没後40年　横溝正史展
―新発見書簡に見る探偵小説作家の素顔―

期間　令和３年７月16日～９月23日
会場　展示室１・２・３

二〇二一年に没後四〇年を迎えた横溝正史の書簡を中心にした展示会を開催した。横溝の友人で、熊本ゆかりの作家、乾信一郎に宛てた新発見書簡二四〇通を含む、当館所蔵二七二通の書簡を元に横溝の戦後の活躍を四期に分け、時系列で展示を構成した。

はじめに、乾信一郎と横溝正史について、二人の活動や関係を自筆原稿や遺品とともに紹介した。

第一章「岡山疎開の頃・本格探偵小説作家へ　昭和20年～23年」では、名探偵・金田一耕助が誕生した頃を紹介した。この頃の書簡には、戦後、本格探偵小説作家として、強い意欲を持って作品に取り組んでいった様子が綴られていた。また、乾が執筆を勧めてくれた「人形佐七捕物帳」が横溝の生活を助けてくれたことへの感謝も書かれていた。また、金田一ものが連載された雑誌『宝石』とともに、二松学舎大学所蔵の「獄門島」草稿や、「八つ墓村」の原稿を展示した。草稿と掲載内容とに違いがあり、横溝の執筆過程における思考の流れが垣間見られた。

第二章「名探偵・金田一耕助の活躍　昭和24年～36年」では、東京に戻った横溝が金田一耕助物を中心に精力的に執筆していた頃を紹介した。この頃の書簡では、「悪魔が来りて笛を吹く」に書かれていた須磨・淡路の様子が、知人への取材で執筆されたことなど、執筆の舞台裏となる内容が綴られていた。また、「犬神家の一族」の草稿も展示し、何度も書き直した家系図から、横溝が作品の根幹となる人間関係の構築に苦労していたことが伺えた。

第三章「読みつがれる『人形佐七捕物帳』　昭和37年～48年」では、社会派推理小説全盛期、新作の依頼がなかった頃を紹介した。全集化された「人形佐七捕物帳」に手を入れながら、新作「仮面舞踏会」を構想し、古希を迎えながらも、未だ執筆への意欲を失わない様子が窺える書簡を紹介した。

第四章「横溝正史ブーム到来　昭和49年～54年」では、角川文庫や映画化による大ヒットを迎えた頃を紹介した。この頃の書簡では、ブーム到来を喜ぶとともに、その様子に戸惑っている書簡を紹介した。また、新作長編に取り組む姿も紹介した。長年のファンであった近鉄バファローズの資料や、千枚を超える「病院坂の首縊りの家」「悪霊島」の原稿も展示した。

関連行事として、二松学舎大学教授の山口直孝講演会を開催した。コロナ禍のため、オンラインのみの開催となり、ユーチューブ配信を行った。予定していた文学講座「文豪ストレイドッグスでブンガクしよう」は中止した。ギャラリートークは二回実施し、金田一耕助に扮した展示担当者が館内を案内した。

当館所蔵の横溝正史書簡（乾信一郎宛）の概要を示した目録を作成した。入手方法は当館ＨＰを参照のこと。

（無くなり次第受け付け終了）

かたくなにみやびたる 蓮田善明と『文藝文化』

期間　令和３年10月14日～12月５日
会場　展示室１

太平洋戦争開戦から八十年を迎え、国文学者蓮田善明の文学的事績と雑誌『文藝文化』を振り返る企画展を開催。蓮田善明遺族、清水明雄氏、三郷町立図書館の協力を得て、全八十三点を展覧した。

第一章「『文藝文化』という文学運動」では、まず同人の清水文雄、蓮田善明、池田勉、栗山理一と四人共通の恩師である斎藤清衛を紹介。四人は広島高師・文理大の同窓で、それぞれ教員として勤めながら雑誌を創刊、古典精神の復活を目指す文学運動を展開する。『文藝文化』以前に刊行した同人紀要『国文学試論』や自筆原稿、斎藤の『作文』教科書などを展示した。教科書は全国の中学校などで採用されたが、編集は同人四人が担当。斎藤が印税を活動資金として提供し、『文藝文化』発行につながった。

「国文学」や「研究者」という垣根を越えて文学に関わろうとした『文藝文化』には、同人以外に約百四十名の執筆者があった。そのうち国文学者では垣内松三、風巻景次郎、石井庄司、松尾聰を、その他の寄稿者では俳人飯田蛇笏、詩人高村光太郎、版画家棟方志功を紹介した。またのちに熊本商科大学（現熊本学園大学）学長となる丸山学、現荒尾市出身で著書に『念ずれば花ひらく』などがある詩人坂村真民も取り上げた。雑誌『日本浪曼派』の保田與重郎は自筆の書軸とともに紹介。同人らと親交があった詩人伊東静雄は、文藝文化叢書から刊行された第二詩集『夏花』の自筆原稿（清水明雄氏蔵）を展示した。清水の教え子であり、『文藝文化』で初めて広く紹介された三島由紀夫は、小説「花ざかりの森」を含む初期原稿四点を初公開した。

昭和十九年、『文藝文化』は戦局悪化などのため七十号をもって終刊する。この号には蓮田の「おらびうた」が掲載されるが、本展ではこの歌稿（手帳）も公開。スラバヤ（現インドネシア）で佐藤春夫に託されたものである。

第二章「かたくなにみやびたるひと」では、蓮田の生涯と執筆の流れを〈文学少年・教師時代〉、〈応召／中国戦線より〉、〈帰還／旺盛な執筆・言論活動〉、〈二度目の応召〉に分けて紹介。主な展示資料には中国戦線から送られた書簡や『文藝文化』掲載の原稿などがあり、戦地でも活発に執筆を続けた蓮田の姿を偲ばせた。清水文雄の「戦中日記」（清水明雄氏蔵）は「蓮田がゐないのが淋しい」などと記しており、身近な視点からの蓮田像が伺える。帰還後、阿蘇・垂玉温泉で起筆された唯一の小説「有心（今ものがたり）」の自筆原稿も公開した。

第三章「天地のはじめの時」では国文学者・蓮田を象徴する『古事記』研究を特集した。蓮田が所持し、研究の痕跡も残る『真淵訓点延佳鼇頭古事記』（貞享四年刊、寛政七年校合）や、蓮田はじめての著作『現代語訳古事記』などを紹介した。

会期中、関連行事として坂元昌樹氏（熊本大学）による講演会「蓮田善明の思想と文学―『文藝文化』と『日本浪曼派』の間」を開催した。

戦時、愛国心を鼓舞したと目された『文藝文化』は、戦後その評価を失った。今回の企画展が蓮田とその文学を再考する機会となれば幸いである。

かたくなにみやびたる―蓮田善明と『文藝文化』―関連講演会

蓮田善明の思想と文学
―『文藝文化』と『日本浪曼派』の間―

講師：熊本大学大学院人文社会科学研究部 教授
坂元 昌樹 氏

令和３年11月14日(日)

坂元昌樹教授

Ⅰ、視点の設定
―蓮田善明の「伝説」と雑誌『文藝文化』

蓮田善明は、日本の近代文学や近代文化において語られる際に、一種の「伝説」的な存在として語られ続けてきました。特に三島由紀夫との関係においてその傾向があり、三島由紀夫による蓮田への献詞「古代の雲を愛でし君は　その身に古代を現じて　雲隠れ玉ひしに　われ近代に遺されて　空しく靉靆の雲を慕ひ　その身は漠々たる塵土に埋れんとす」は広く知られている文章です。また、小高根二郎は蓮田の伝記研究『蓮田善明とその死』において「敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは……わが蓮田善明であった」と評価します。それらの三島や小高根の言説は、戦後において蓮田の存在を「伝説」化してきました。そのような蓮田の「伝説」化を実証的に解体する試みも近年行われつつありますが、その「伝説」は、現在も依然として続いているように思います。

私たちが、そのような蓮田の「伝説」化から離れて考えるために必要なのは、蓮田善明という文学者の生涯の歩みを先入観なしにたどること、そして『文藝文化』の文学運動をイメージで語るのではなく、具体的な雑誌やテキストを対象として丁寧に読み解くことであり、それは現在も不可欠だろうと思います。

Ⅱ、文学者としての蓮田善明
―その生涯と著作をたどって

『文藝文化』で蓮田の盟友であった清水文雄による「蓮田善明年譜」は、簡にして要を得た年譜であり、その出生から没年までの歩みを見事に整理しています。蓮田の生涯の歩みを知ることは、その思想と文学を知る基礎となると思いますので、少し時間をかけてご紹介します。ここで蓮田の生涯の歩みを、熊本での生誕に始まる幼少年期から広島高等師範学校時代までの学生時代（明治三十七年―昭和二年）、岐阜・長野・台湾台中での各地における教師時代（昭和三年―昭和十三年）、『文藝文化』創刊以後の活動と召集に伴う戦地での経験（昭和十三年―昭和十八年）、再召集から没年まで（昭和十八年―昭和二十年）の順にたどりながら考えてみます。このように蓮田の歩みをたどりますと、蓮田の生涯には郷土である熊本という環境から来る影響があり、師の斎藤清衛や『文藝文化』同人の清水文雄・栗山理一・池田勉らの国文学者、また伊東静雄や佐藤春夫、三島由紀夫らといった文学者との各時期における多様な交流からの受容があったことを確認できます。その環境と交流が、蓮田という文学者を作り上げたのです。

続いて、蓮田の著作の展開を確認してみます。主要な論文・創作等の中で、最初期の『国語と国文学』に発表した論文は、国語教育や国語学にかかわる論考です。続いて、『国文学試論』に掲載された論が「真福寺本古事記書写の研究」であり、蓮田は初期に『古事記』を対象とした文献的研究からスタートしています。蓮田の著作の出発点が、後年の神がかり的な蓮田のイメージとは一線を画している点に注意するべきです。そして雑誌『文藝文化』創刊号に「伊勢物語の『まどひ』」という論文を掲載しますが、その後『文藝文化』を発表の舞台として一九三〇年代の末から一九四〇年代にかけて相次いで発表された論考は、上代・中古文学、中世文学、近世文学に至る幅広いものであり、その対象の多様性は注目するべきものです。そのような多様性が、蓮田の著作の特徴です。

一九四〇年代に入って以降の単行本『神韻の文学』『本居宣長』『鴨長明』といった著作は、基本的には古典文学に集中した著書ですが、蓮田の生涯全体の著作を概観する場合、その著述の範囲が、狭義の国文学研究、特に古典

文学研究に限定されないという事実は重要な点だと思います。蓮田による詩歌や小説「有心」などの文学的創作の持つ独自の性格はもちろん、『鷗外の方法』『預言と回想』といった著作を含めて、蓮田の著作は多様で、日本の近代文学や世界文学も含めてきわめて幅広い目配りを行っています。蓮田を古典文学研究に集中した国文学者としてのみ捉えてしまうことは、この人物の思考が持っていた豊かな可能性を見逃してしまうという点を強調しておきたいと思います。

Ⅲ、蓮田善明と保田與重郎
―『文藝文化』と『日本浪曼派』の間

蓮田が活動の基盤とした雑誌『文藝文化』と並んで、昭和十年代当時の文壇における日本主義的な思潮の代表として知られる文学雑誌に『日本浪曼派』があります。ここでは、蓮田と、雑誌『日本浪曼派』を代表する文芸批評家である保田與重郎を比較してみます。蓮田と保田とによる日本の古典文学や文化についての言説には、多くの共通点と同時に、無視できない差異があります。

第一に、蓮田と保田の両者の文化的トポスの問題です。蓮田は、その生涯の歩みを通して確認した通り、熊本の鹿本郡植木町出身で済々黌中学を卒業するまで熊本で過ごしています。熊本という空間が蓮田の日本の古典文化への関心に与えた影響は多大です。蓮田は、熊本神風連に言及した「神風連のこころ」と題した文章の中で、熊本肥後藩の藩校時習館教授の高本順から長瀬真幸、そして林桜園へと至る「肥後の国学の統流」に言及しています。蓮田の日本の古典文化への関心の知的背景の一つには、熊本国学の伝統の存在が推察可能です。一方で、『日本浪曼派』を代表する批評家の保田は奈良県桜井市の出身です。その著作には、自己の郷土である大和地方における古典文学・文化の伝統への賛美が繰り返されています。九州熊本に育った蓮田の場合、保田とは異なる形で日本の古典文学・文化への洞察を育まなければならなかったことは確かで、同じ古典を論じる場合にも、両者の背景から由来する差異が注意されます。

第二に、蓮田と保田の両者の「外地」との交錯の問題です。蓮田と保田による日本の古典文学や文化についての言説は、共通して昭和十三年ごろに大きく変化します。その背景には同時代の日本を取り巻く歴史的な情勢変化がありましたが、同時に、両者がそれぞれの形で当時の日本にとっての「内地」に対する「外地」＝植民地における経験を経由しています。蓮田は、年譜でもたどった通り、昭和十年から十三年まで台湾の台中商業学校の国語教師として過ごしています。この台湾での経験が持つ蓮田の思想形成における重要性には、十分に注意が払われる必要があります。また、保田の場合、昭和十三年に佐藤春夫らとともに朝鮮半島を経由して中国東北部を中心とした中国各地の旅行を行いますが、この旅行経験は保田にとって重要なものとなりました。昭和十三年前後の近接した時期に、両者の日本の古典文学・文化の探求が、それぞれ台湾と蒙疆という「外地」を媒介して変容し深化したと考えられる点は、興味深いものです。

第三に、蓮田と保田の両者による日本文学史観の問題です。それぞれの日本文学史についての基本的な思考を捉えるとすれば、蓮田の場合は、万葉集に始まり、在原業平に代表される伊勢物語、古今和歌集、源氏物語、そして芭蕉に至る系譜を「みやび」という概念で体系化する文学史観です。一方で、保田の場合は、中世の後鳥羽院を日本文学史における重要な集約者として評価した上で、先行する西行と後世の芭蕉を共に「隠遁詩人」という観点から系統化するいわゆる「後鳥羽院以後隠遁詩人」の系譜の主張があります。蓮田と保田の両者の日本文学史観は共通性と同時に多くの差異を含んでおり、同列に論じられがちな『文藝文化』と『日本浪曼派』の差異を考える上でも注意される点です。

Ⅳ、蓮田善明の思想と文学
―その再評価に向けての試み

今回は、蓮田の思想と文学について、最初にその「伝説」化から離れて考えようという立場から視点を設定し、続いて蓮田の生涯の歩みと著作の展開を検討した上で、『文藝文化』グループと同時代の『日本浪曼派』グループの比較を進めてきました。蓮田の思想と文学には、その西洋文学の方法を含む世界文学への関心のあり方や、キーワードである「みやび」という思想の評価も含めて、まだ十分に検討されていない課題が多く含まれています。今回の蓮田と『文藝文化』についての素晴らしい企画展が、従来の「伝説」化とは異なる蓮田の再評価に向けての重要な契機となることを心から願っています。

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと17
期間　令和３年６月14日～７月４日
会場　展示室１

◆生誕一五〇年 玉名出身の英文学者　戸川秋骨

戸川秋骨は明治三年高瀬藩（現玉名市）生まれ。まず、幼き頃の思い出を書いた随筆集や明治期の行政文書で戸川家を紹介。上京後、明治学院で島崎藤村や馬場孤蝶らと交遊、「文学界」同人の頃の馬場宛書簡、山口高等学校時代の事を書いた「存じ候　第一歩」、戸川の就職の斡旋に関する夏目漱石書簡（大谷繞石宛）、関東大震災での小泉八雲家との交流を描いた原稿「ヘルン先生の孟宗薮に仮寝して」など、戸川の熊本との繋がりと、多彩で幅広い交友や業績を紹介した。

◆和歌（うた）をよむ武士たち ―相良家の歌道―

武士といえば、刀を持って戦う兵士としてのイメージが強いが、和歌を詠み、流麗な文字を書くなど、一流の教養を身につけていた。本展では、熊本県立図書館が所蔵する相良家文書をひもとき、戦国の乱世を戦い抜き、七百年の長きにわたり人吉球磨の地を治めた相良家と和歌との関係を紹介した。主な展示資料は、戦国時代に相良義陽・近衛前久らが詠んだ詩歌短冊の写し（当座詩歌短冊）や、江戸時代後半の当主・相良頼徳が記した古今和歌集の講釈の記録（古今和歌集聞書一）など。

アーカイブズに見るくまもと18
期間　令和４年１月５日～２月28日
会場　展示室１

◆激闘の記録、西南戦争の絵図

熊本県立図書館蔵の熊本縣公文類纂「事変西南役」には、往復文書、提出書類控が収録され、戦地図二十七葉、官軍墓地図二十六葉も残っている。今回、展示した戦地図四点（山鹿町、玉東町木葉・二俣、八代市）には、官軍・薩軍の両軍が対峙する様子や進路等が描かれ、西南戦争終結後に生々しい記憶が残る中で作成されたことが分かる。

◆生誕１５０年 渋川玄耳と篠原温亭

今年、生誕一五〇年を迎え、同じ年に亡くなった渋川玄耳と篠原温亭を取り上げた。二人は俳人・新聞人という共通点もある。渋川玄耳は熊本の第六師団に配属され、夏目漱石の主宰する俳句結社「紫溟吟社」に関わった。日露戦争後は、朝日新聞で社会部長としても活躍した。篠原温亭は宇土の出身で、『国民新聞』に勤務し、記者として勤めながら、小説や写生文などを執筆した。二人の自筆の俳句短冊とともに、渋川と交流のあった正岡子規、夏目漱石書簡、篠原と交流のあった高浜虚子書簡を展示した。

明治の熊本地震
明治22年・27年
―熊本県庁の記録―

期間　令和３年４月16日～７月４日

熊本地震から五年目を迎える時期に合わせ、ロビーの一角に「明治の熊本地震」と題し、図書館蔵の地震資料の一部を展示した。

当館では、史料調査の一環として、かつて熊本で発生した地震資料の発掘に努めているが、明治二十二年の熊本地震の際に県庁の官吏が地震の情報を伝えるため、国や他府県と交わした電信記録の原本が、県庁の公文書を収録した熊本縣公文類纂の中から見つかるなど、その後確認された資料も少なくない。また、五年後となる明治二十七年に阿蘇地域で発生した地震の調査報告なども併せて紹介し、山体の一部が崩落するような生々しい被害の記録なども注目を集め、来館者に災害への備えを不断に行っていくことの必要性を訴える展示となった。

共同展示
3・11文学館からのメッセージ

◆震災の記憶と復興エール

会期　令和３年３月11日～５月10日

全国文学館協議会の呼びかけによる共同展示「３・11文学館からのメッセージ」は、二〇一一年の東日本大震災を契機に、死者に対する鎮魂と被災者への慰謝を願うという趣意に賛同した全国の文学館で開催。当館では、熊本地震に際して、全国の文学関係者から寄せられたメッセージの一部を展示。

マンガコーナー

展示室３のマンガコーナーは、企画展、収蔵品展のテーマに合わせて、約二百五十冊の漫画を手にとって読めるように設置。二ヶ月程度で入替を行っている。資料はＮＰＯ法人熊本マンガミュージアムプロジェクトより提供。

今年度は、「横溝正史展」に合わせ、「金田一少年の事件簿」「名探偵コナン」などの推理漫画を設置。十月からは、「蓮田善明展」に合わせて、「あさきゆめみし」等の古典文学をテーマにした漫画を設置。一月からは、収蔵品展に合わせて、文芸マンガ、歴史マンガを設置した。熱心にマンガを読んでいる来館者の姿を見かけたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、漫画の設置をとりやめた時期もあった。

新収蔵資料

○山口輝也新聞連載挿絵原画二百九十八枚
（写真は「西南役伝説抄」の三枚）

平成十七年（二〇〇五年）と平成十九年に熊本日日新聞で連載された「愛子と蘆花の物語」（本田節子作）「徳冨蘆花ふるさと名作選」（徳冨蘆花作）、「西南役伝説抄」（石牟礼道子原作）の挿絵原画。カラーで紙面に掲載された。画家の山口氏は、昭和八年熊本市生まれ。海老原喜之助に師事し、「世代会」を結成、昭和四十六年熊日総合美術展熊日賞、平成十六年第五回ドローイング・デッサン・版画コンクール大賞受賞。美しい挿絵の一枚一枚から作品のイメージや心の動きなど、様々に想像が膨らみ、読者を作品世界へ誘う。挿絵原画の魅力を深く味わえる作品群となっている。

友の会事業

◆**定例事業**

○**月案内発行**　くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○**文章勉強会**　毎月一回開催。有志による文章講座。

○**歴史勉強会**　毎月一回開催。有志による古文書講座。

◆**「湧水」増刊号「新型コロナウイルス作品集」発行**

◆**「湧水」第二十九号発行**

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆**今年度の主な事業**

５月９日

友の会総会

（記念講演会はコロナ禍のため中止）

11月11日、２月24日

文学・歴史探訪

水前寺・江津湖の文学・歴史解説

※予定をしていた１月15日の湧水講演会と２月３日の文学講演会は、コロナ禍のため中止。

11月11日の文学・歴史探訪

くまもと文学・歴史館 YouTube チャンネルの開設

令和３（2021）年８月からくまもと文学・歴史館の YouTube チャンネルを開設した。本年度は当館の紹介動画、企画展「没後40年　横溝正史展」の講演会・展示解説動画、同展及び企画展「かたくなにみやびたる―蓮田善明と『文藝文化』―」の展示紹介動画を公開した。今後も SNS を活用し、館活動の周知を図っていきたい。

これからも収蔵資料、展示会の紹介動画をアップしていきます。
チャンネル登録をお願いします。

https://www.youtube.com/channel/UCEYGrWZGdXUDtFJi1rYU5-g

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地
熊本市中央区出水２丁目５番１号
（熊本県立図書館併設）
電話（０９６）３８４―５０００㈹

開館時間
午前９時30分～午後５時15分

休館日
火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料
無料

最寄りの交通機関
(1)市電＝「市立体育館前」下車徒歩５分
(2)バス＝「水前寺公園・県立図書館入口」下車徒歩５分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合せ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第７号
令和４年(2022年)
３月31日発行
編集
発行　くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話096-384-5000㈹
FAX096-385-4214